驅落の驅落

第一回

古代形の更紗の襖節のまゝの杉の床板幅物は蒲鉾形にそッた伊川院のねなれ物焼錆のやうな古銅の花活に萎れかヘッた女郎花煙草盆には燃さしのやうな煙い名香がくゆッて居るといふ結構なる料理屋の小座敷に差向ひの通仕立一人は灰吹から龍の如く立昇る煙草の煙に咽せて飲みかけた茶を注ぎかけ夫で漸やく消口を取ッたところ一人は何か物思ひありげに散髪の割目を右の手で押へ市區改正後の往來は斯う眞直に行くだらうかと云さうな顔色折から水屋口ともいふべき太鼓張の襖をスーと開て女中が無暗としとやかにして杯盤を並べるをジロリと横眼で見て頭へ堀割をと考へて居た若い方が花ちやん例も美しいが今日は格別にきらびやかだね　オヤ有難うございます暫らく貴君入ッしやいませんでしたが今日は如何いふ天氣豫報で、　ヘン柳ね曇天には驚くよ、胸の曇りの晴やらずかね花ちやん例も美しいねと云うと思ふが直さんに云れたから別段御挨拶は致しません、是は〳〵御丁寧に御念の入りました事でオホヽホ彼の今日は誰君に致しませうと承まはるも野暮ですかね、オット今日は祕密事件が有るのだから君といへども、お席にはお邪魔なの夫なら臺所へ入ッて嘘でもして居りませう、コウ三つなら僕だと思ひ玉へ、四つなら肩を叩き玉へ、五ならお泊りだ、宜ございます覺えて入らッしやい、古風な樣だが手を叩くまで、立聞はしても宜うございませうねオホヽホと愛敬を廊下へ溢して立ッて行く跡に年嵩のが膝を迫め專さん何だい話しといふのは何だか大層大事件らしいから聞く事があるなら醉ないうちに役を濟せたいものだ、先づ一二杯景氣を付けて呉れ玉へ少し素面では云出し悪いと云ッて醉ては侭ほいけないといふ一件だ、何だなハテナむづかしいな、それほど心配の筋ではないが御存じの通り少し我輩もかぶり中だから、御斷りに及ばず、左樣腰を折るから話が長くなッて困る、腰を折るので悪ければ起ッて居て開う、コウ橋さん君は朋友の心痛を、誤ッた〳〵トコロで其仔細といふは、實は君に隱して居たが新宿の或る貸座敷へ二子の鮎の歸に引かゝッて實は夫から何サ緣は不思議なもので實は何さ實は申込に承諾を與へて完全なる契約が整ッたといふ譯だが立派に夫を如何する事も出來ない今の身分だから實は夫を連れ出して當分身を隱して其間に計策を廻らすつもりだが此心中の機密を打明けて力を借るべき者君をおいて天下になしだ元より非諾サ非謀だけれど夫の一策に決心して向うにも打明けてあるのだから斯う云出した上で君が反對説を唱へるなら決鬪と覺悟はきめてあるのだ、危ない反對しないよ煙管を持て最う決鬪の用意に取掛られては恐れる今さら仕方が無い卑怯に決鬪を恐れてではないが據所ない同意して力を貸さう其かはり僕もまた類似のことを頼みたいが其跡で否とは云ふまい、橋さん僕は男だ君が火の中へ飛込めと號令すれば直に飛び込むよ此杯洗の水を一息に飲めと命じるなら忽ち、コレサ飲んで見せなくても宜い誰も何とも命じやアしない君は餘程逆上て居る君が其位熱心になるのだから相手は定てすばらしからう、橋さん君は冷淡だね、冷淡、デモすばらしからうは冷淡だ最と口をつぼめてスッバラシカラウと力を入れ

て云て吳玉へ、手數の掛ッた事だ其スッパラシイのは何所の何といふのだ、元近江のお絹さまと仰有るね　ナニ元近江、左樣サ元近江、お絹といふ娼妓か、お絹といふ娼妓サ、あの元近江のお絹、左樣安く呼付にしないでもだ

第二回

始終を聞て橘太郎は膝を組み眼を閉ぢて太き息をホット吐けば專吉は膝をすり寄せコウ橘さん男らしくして吳れ玉へ何も大した迷惑をかけるのではない左樣腕を繩に綯らずとウンと返事をして下さい高で知れ向は斯うだ僕がすまして元近江へ揚る例の如く程よく遊ぶネヨシカ澄して床へ廻る時刻を謀ッて二階座敷の窓を明け屋根傳ひに塀際へ來るお絹は山鵲縮緬の胴抜に白縮緬のシゴキ手拭を吹流しにして一寸御へたといふ拵へネヨシカ僕が上から抱き下すスルト君は兼て下に忍んで居て合圖を待て天水桶を足代に塀へ上る其肩へお絹が足をかけるオット心得にと君が抱き止める僕が手を放す間髮を容れずといふ細工だ僕も其時の形には少し好みがある君も同じ事なら少し氣取る方が役德だらう危なさ怖さ嬉しさのなどと口三味線でやッて吳れると大きに引立といふものだそこで僕は諸事知らぬ顏窓をメめて床の中に一人で居る男が來る娼妓は如何したと少しチン〳〵氣味で云ふ男は驚いて貴方の所に娼妓が居ないとはつひぞ無い事だ如何も今年は磐梯山以來不思議な事が續きますか何か云ッて障子の外へ出るお絹さん〳〵と呼んで見る居ない居ない筈だよと此方は鼻唄だが其所は萬事拔目なくお絹が居ぬとはとんだ事だ探せ探せと和事師から出て宿禰太郎を勸めるサア大變だの娼妓紛失上を下へと返す中で僕は萎れかへッて彼のお絹に限ッてはよもやよもやと思ひしに起請も空と鳴る鐘のとか何とか恨みッぽい事を云ふ朋輩娼妓も來てホントにお前さんにお氣の毒ですネエ彼人も何といふ氣まぐれだらうこんな優しい實の有る人がありながら如何して驅落をしたのだらう相手は誰だエ誰だらうネ專さんお前さん彼人が居ないからッて是ぎり來ないと恨ますよか何か直に取込む氣で異に來る其所を調子を合せてあんな不實な奴の事は何とも思はないが何だか踏臺にされたかと思へば皆さんにも面目ないこんな面でも友達の前へ立ませんか何か並べるホントに夫も左樣ですよ私が最ちッと如何かして居ればお否でもお絹さんの身代に願ますがか何かで向うは夫と知らないから眞實に持て來る僞にも左樣でもして吳れば鉛の代りに銀といふものだか何かでチョッピリ罪を作る是れ計略の一つなり夫から此まゝも歸られないか何かで飽まで落付を見せて一直し景氣を直して何か後ろ髮の所で飛び出した跡は此方のもの僕の狂言は是までサ君はお絹を抱き下し直に用意の半纏に人目を忍ぶ月の暈朧々と雁の聲たよりの文を言づけてや何かで他日には一寸道行と見える儲け役だそこで彼所を出はなれ直に八力だが君が義理が堅ければ此所は一人乘別々と願ひたい朋友別ありの本文もあるから其所でお絹の方を連行く先といふは市が谷八幡前の僕の伯父の所ソラ君と雜司が谷へ行ッたとき歸りに寄ッてソレ君が薩摩の名產だといふ鰹の鹽辛を勸められて海苔へ卷いて眼を眠ッてグット呑んだソレ意氣な爺さんの家だ彼所へ連てザット仔細を云て吳ればウ、宜しと直に受込んで吳れるに違ひないドウです大した野暮の役廻りでもなからう此は一番肩を入れてウンと得心して下さい其樣な氣の重いウンでは安心がならないウンとしッかり左樣た〳〵有難いオイ花ちやんお銚子を二三本一所に賴よ

第三回

天龍寺の鐘の聲が二時を報ずる頃に座敷々々の

騒ぎは静まッた、サッサ浮いたの三味線太鼓は茶立蟲に音を譲ッて今まで賑かであッただけ夫だけ淋しさが増した、乳の足りない狗子が夜廻りに出る母犬の跡を追てキャン〳〵と吠るをコレ静かにせぬかと屋根と屋根の間からさし込む下弦の月が脱んだ、大木戸を廻る鍋焼うどんの尻聲を十二社の森の梟が引とッて陽氣を押へ付た、車井戸の釣瓶が人も汲まぬにギーと音をさせるに驚いたかしてヂー〳〵と啼て居た蟋蟀がだまッた、庭から咲き餘た萩の花の下に光るのは露かと思ッたら硝子の欠であッた、俄に暗くなッたは庇の下へ來た故かと仰向たら雲が月の鏡の掩となッたので有た、跡先を見廻すにも見えぬほど暗のに矢張見えぬながらも見廻して來たのは橘太郎といふ友達に異な信義の厚い一個の好男子です、伸上ッて見たり俯いて見たり又は向を透して見たり獨言を云として口を押て見たり二階の便所樋の傍へ袖を擦て鼻を摘で見たり又は思ひ出した樣に反身になッて見たりして内藤新宿の或貸座敷の二階下へ忍び寄ッた、二階の雨戸の溝に水をさしてスート半分ほど音がせずに戸が開た、エヘンと云へばエヘンと小さく外には聞えずに其人たちだけ聞えるやうに合圖をした、井戸まゐッたといふ工合に帶へ結んで小包が下ッた、解いて其帶を振るとそれを絲側の手摺へしッかり結び付けてそれへお召縮緬の半纏を着た手拭を被ッた小褄を端折た化物が攫まッて怖さうに塀の方へ傳はッたツルリドンと少し音がしたが首尾よく受け止めた、上から覗きこんで宜か賴むよと自分の耳へも聞えないほどに叫んだ、下では只うなづいた、帶を手ぐりあげて二階の戸はスーと締ッた、下は無言で黑い化物が黑い化物の手を引いて無暗と表へ出て其所に客待をして居たイヤ此所に見張をして居たといふ方が適當な車夫に腮で指圖をして直に乘せて自分も直に乘ッた餘ほど慌てたか被ッた手拭も取らずに、二階から降ッた化物は窮屈さうに車へ乘りながら手拭を取ッたのを車夫が心を切らうとした絲心の光りでチラと見れば泰宗寺の焔魔でも涎を垂しさうな美人であッた、車は急いだ、石に引きかけてガタリとすれば車中の二人もカタリとした、曲り角を急に曲れば車中の二人も中で衝突した、車は只走りに走ッて橋を越し坂を上り凡そ二里もと思ふ頃ガタリと止ッた、所は何處か一面に蟲の聲で埋ッて居るので考へれば賑はしい市中の氣遣ひはない、手拭を被ッたのは先へ下りて美しいの手を取て垣根を入ればお出ですかと聲をかけて婆さんが手ランプを持ながら戸を明けると此光りに此時手拭を取た人の顏を女は見てオヤと云たばかり、蟲の聲は明を見て一際高くなッた

（評者曰くたの字の韻を踏だ言文一致體凄し凄し）

第四回

專吉は氣もうは〳〵來かゝる伯父の家の前ナア如何も不思議だ貧の盜みに戀の歌とかいッて妙に智略の出るものだ我ながら名策なるには驚いた金の生る木ともいふべきものを引攫はれて却ッて向うでお氣の毒に樣をつけるとはいかにも上鹽梅だ一杯まゐッて重疊々々と太田了竹の臺詞はこんな時だ特に萬事に拔目のない已だから彼所から車へ乘ッて途中で下りてまた乘り替へそれも二三町前で下りたから此へ跡の付く氣遣ひはない然し此方が斯う落付くのは謀計の極意とも知らずお絹は待詫て居るだらう併しそれも伯父さんが苦勞人だから心配をしなさんな昨夜は定めてよくも寢まいから一と寢入するが能い其うちに專吉も來ようから何かで小抱卷に枕を添へて小座敷へ一人置いて寢つくまで是でも見なさいと有合す小本か何か貸してやッ

て呉れるだらう併し勞れては居ても己の事が心配だから中々寢る譯にはいかない其小本を讀むともなく讀んで見れば身につまされて我しらず本の上へ涙が落ちるオヤと思ッて袖で拭いても最う染み込んでしまッた譯だ此から紙魚が生て本を皆な喰ふア、貸本屋には澄ない譯だな、オイオイ專吉ではないか何處へ行く、ヤ伯父さん誠に如何も面目次第もございません、如何した如何した何かまた失策たか面目ないとは何だ、伯父さん如何も恐れ入りました面目ないとは何だとは恐れ入りました左樣氣を通して云て下さると尙ほどうも何ですイヨさすがは僕の伯父さんほど有ます、煽てるな樣子が異しいな少し如何かしやアしないか、いづれ如何かして居りますヘエ如何かしずには居られない譯ではありませんか、有りませんか有ますか已は知らないが又何だらう洲崎が珍しいなんぞと家を有けて親父に嚴しく叱られたのだらうコレよく考へなさい親父が叱るのは貴樣が可愛からだ打つ杖は撫る手だといふ事を思ひなさい、捻る手は喰つく手ですかな、手で喰付かれるか何か莞爾〳〵々そはそはして居るが金でも拾ッたなら直に屆けて出るが宜いよ、金を拾ふ異に仰有いますね拾ッたか貰ッたのか跡でゆッくりお話し申しませうマア貴君は何處へお出なさるのです、今湯へ行かうと思ふところだ貴樣は何處へ行くのだ已が所へ來たのか、已が所へ來たのかと仰有れるとイヽエと申したうございますね、云たければ云なさいな、云たくッても云れません伯父さんモシ伯父さん如何もいろ〳〵お世話樣でしたが彼さへ首尾よく行けば屹度生れかはッた樣に辛抱致します、彼とは、伯父さん甥を弄るのは犬にチン〳〵をさせるより罪だとお釋迦樣も仰有いました其樣に氣を揉ませずに確に已が預ッて桐の箱へ仕舞ッて置いたと安心させて下さい、ウン彼の事か、其事で斯う浮身をやつして居るのでございます、變ッた男だな直は上ッてもまだあんな蒟蒻本なら幾計もあるにサ今日彼本を取に來たのか、本、桐の箱へ仕舞ッたかと云ふからよ、伯父さん手を合せます此通りですどうぞ左樣トボケないで安心させて、如何も變だ爰でそんな事を云て居ると人立がするマア家へ入んなさい婆さん大きな物へ水を一杯汲んで來てやッてお呉れサア少し氣を落付けるが宜いそれを飲んで、伯父さん、能よ伯父さんは斯して傍に居るよ氣を落付けなさい例より餘程親父に嚴しくやられたと見える能わ心配するな已が詫をしてやるわサ、伯父さん夫では參りませんか否何來ては居りませんか、誰が、お絹が、お絹とは、伯父さんコリヤ如何したんでございませう、已が知るものか泣ては尙ほ分らない如何した譯だ、夜中だから家を間違たか知らん、ナニ朝だもの家も間違はず確に已の家だナ、夫でも若しや、確だといふ事よ、如何も樣子が、コレサ何處へ行く婆さんコリヤア大變だ醫者を呼んで貰はう

第五回

調練場を前にして右隣りは貸地の札、左は英漢數學教授と札を打ちて學問も定めて奥深の破れ家、此の間の一軒家は橘太郎が乳母の家なりお絹は今連れ出されし專吉の友達といふは是れも二世講中の橘太郎なるに吃驚したれど左れど手馴れし事なれば翌日の朝の菜にとはしけて置いた蠹の魚を猫に取られた程には慌てず澄して手を引かれて奥に入れば橘太郎は眼の色を變ヤイ手前はよくもよくも已を踏付にして人もあらうに友達付合の中の專吉と言交したなヤイ手前は何時か已に連て逃げて呉れと云ッたのは僞だナコレなんぼ泥水の濁ッた心だと云て少しは義理を考へて見ろ忘れもしない去年の三月二十四日だ小金井の櫻といふのを知らないのも殘念

と友達に誘はれて出かけたところが時が早くッて苔も堅く枯木を眺めたうへ寒い風に小雨交りで閉ぢ付られ景氣直しに飛上ッた彼の家で引付が極ッた手前が座敷となると他の者と變ッて居たが偶に來る所といひ初の家で文句も云へずとゲット蟲を押へて濟すと床になッてまた手前が出た其時手前は何と云ッた遣手が皮肉で一旦私と極ッたのを平生胡麻を摺るおみめと振り替へられ口惜くッてならないところ今おみめの馴染で切れの能い客が來たので又私を貴君へ出したのですよ私は嬉しいが貴方は嘸御不足でせう貴方も何とか云ておやりなさい餘り氣が能過ますよとコレ手前が齒をギリ〳〵と云せながら云たヂャアねェか其時已が何と云た夫は左樣した入込んだ事が有るか知らないが最初から目星をつけたお前が出て呉れたのだから文句はない所か大悦びだお前も左樣した意氣張があるなら向うへ見せつけに一騒ぎやらうと五圓何某の大散財をしたのを忘れもしめえ其時手前は何と云ッた私の屑かないばかりに此樣な冗をさせて濟まない然し斯花美にして見れば尚更お前さんが是限りにして下すッては私の顔が立ちません何卒實があるなら助けると思ッて續けて來て下さいしがない身だが私も少しの働きはしますからとうるみ靡で云たのを忘れたかヤイ其時已が何と云ッた已も男だ斯いふ羽目になるからには跡へは引かないよく明日來る抔と口では云ふものだが已は其樣な事は云はない實があるか無いか仕打で見て呉れと云ッたら手前は嬉し泣に泣ながら何と云ッた私も元からこんな身では有ません川越の方の士族の娘です恥をかゝせられてノメ〳〵生て居られません今貴君の其の一言で胸の支へが下りましたと云ッたのを忘れたかヤイ此の畜生其の翌晩已が如何した武士の娘の思ひつめてどんな事でもあッてはと用を缺いて一里半もあるところを駈け付けたのを忘れたか其時手前は何と云た最う他人がましいから口で禮なんぞは云ない貴方も恩にして下さるな殺したければ今直に殺して下さいと云たのを忘れたかコレ其口で云ッたのをよもや忘れはしまいヤイ此の女め夫から已が通ひ出して注ぎ込んだ金はどの位だと思ふ彼の金が今あれば百年だの五十年だの と濟崩しを云ないで東京市區改正は已一人の獻金で立派に出來るわそれを少しのうち遠ざかればとて彼事吉に見かへるとは云うやうない人でなし已々どうしたら腹が癒るだらうと拳を握りて詰め寄ればお絹は顔をぢッと見て橘さんお前最う云ふ事は夫切なのと落つく顔に尙ほ急込みナ、何だと云ふ事は夫切りかとコレ云ふ事は鐵道の荷車に積み餘る程あるが胸がグラ〳〵して順よく出て來ないのだ此の三年二滿め、左樣サおたふくサ夫だから只では迚も望は協はないから如何かしてお前さんに實を見せて添遂たいと思ッて命がけで今度の狂言を書いたのですわネ、エ、何だと

第六回

虚から出た虚出まかせの間に合ひ口も濕ッぽく泣を作ッてお絹は仰向き恨めしさうにヂット見る眼元の潮に橘太郎は握り拳も緩みけりサア橘さん打ちたければ打て下さい生て此樣に苦勞をするよりお前さんの手は掛ッて寧そ殺された方が餘程增だよ實に如何したら男といふものは斯う實が無いのだらう私の思ふ百分一もお前の心に有るならば少しは察して下さりさうなものだのに夫を反對に私の心が變ッたと自分勝手の小言ばかり亭主と思ふお前さんの事だから何樣な無理を云れても仕方がないが夫では餘り酷過ぎますマア積りにも知れさうなもの彼樣な否味な青脹れに私が何で心までを許しませう夫もお金でも澤山ある人なら又疑はれても仕方がないが家を出された宿なし同然いかに私が物好

でもマサカ彼様な者に、ヤイ〳〵夫なら何故驅落をしようとした、夫が皆なお前の爲め平生の利口にも似合はない大抵推量でも知れませうに、知れないナ、ダカラお前さんは餘りですよ先日ソレ迚も見抜きは出來ないから連て逃てと相談を掛けたときお前さんは抄々しくも返事をせず夫限り十日も來ないから是は一途に連れ出しては跡の掛り合になると夫を恐れて手を引いたので有らう夫なら誰ぞ踏臺を拵へ一旦其人に浮名を儲けさせて置いて左樣して其所を飛び出してお前さんの所へ便ツたらナンボ氣强いお前さんでも少は不便と思ふ氣が出て萬一したら夫婦にもと思ふばかりを力草縋ツて下りた帶留の切れぬは二世のえんやッと危ない所を脫れたもお前さんのお蔭とは餘ほど深いと悅んだ甲斐もない薄情お前さんに見捨られゝば元より外に便りはなし私は覺悟を極めて居ます其變りお前さんが女狂ひをする度に屹度恨一を云に出ますよ、エ夫ぢやア何か彼の專吉と驅落の約束は彼奴を踏臺にして矢張已の所へ來る積りか、來る積りかとは情ない夫ほど私を實のない者と思はれたのが口惜いから私は死んで此の恨を、トンダ事だ取付れて堪るものか已はお前の知ッての通り極臆病だからソレ何時だか夜中に小便に出てお前の上着を借りて引かけて行たもんだから便所の戸へ挾んで取れないのを中で化物が引張るのかと思ッて叱驚してキャッと云ふ樣會に枇杷の種に辷ッて左樣々々去年の六月であッた氣絶した事があッた程だから化てなんぞ出て呉れては困るお前を元から疑ふ譯はないが左樣した深い事を知らないから、夫がお前さんの薄情といふもの察しのないといふもの分らないといふものですダカラ私は生て居ても詰らないから、コレサ已が惡かッたと云ふに氣が早いな已も實は已を捨て專吉なんぞに見變へるとは有るまじき事だと疑ッたのだがナ其所がソレ凡夫の淺猿さだテ、ダカラお前は實が、イヽサ已が惡かッたから誤るといふのに能ぢやないか然し專さんはさぞ驚いて居ねだらうイヽ二本棒とは彼男の事だ

第七回

コウ專さん血眼になッて何所を廻るのだ、君は橘さんを知らないか、君は橘さんを知らないのか、君は橘さんの居る所を知ッて居るのか、君は橘さんの意氣事を知らないのか、意氣筋とは何だ彼奴は何處に居る早く話して、豪氣に急くな僕が意氣事といへば君は勝手に意氣筋と直して一人承知して居るが筋と事とは大きに違ふね先づ筋とは意氣らしいといふ疑ひの有るうちの事だが橘さんのは美しいのを取り上げて早く既に懷中へ入れてしまッたのだから、氣が急くのだ此通り息が苦しいほどだ惡いところは跡で誤まるから橘公の居所を、敎へて呉るか夫はいけない或る馬鹿者が衞へ出さうとしたのを横取ッたのだから當分沙汰なしと頼まれたものをナンボ君たッて居所まで明しては朋友の信誼でないからアイタヽコレ何をする專さんお前は氣が違ッたのか突然私の咽喉を苦しい馬鹿力だナ何だか知らないが惡ければ誤まるから助けて呉れコレサ左樣酷く〆めては息が止るよ、ヤイ手前も敵の片破だぞ馬鹿者とは誰の事だ斯なれば皆な冥途の供だ覺悟をしろ、專さんコレサ專さん本氣で左樣な事を云ふのかコレサ苦しい馬鹿者とは誰の事だか私は知らないよ只馬鹿者と聞たから馬鹿者と、よく馬鹿者だの馬鹿力だのと云合せて已を踏潰すなサア死にッこだ覺悟をしろ、コレサ堪忍してお呉れナンボ決鬪論が流行と云ッて譯も云ず突然咽喉を〆める奴があるものか苦しいから放して、引搔ても放さない敵の加擔人思ひ知れ、敵の加擔人だとそんた事は知らない橘さんの居所を敎へるから、屹度か

屹度なら赦すが謔を吐くと咽喉管へ喰ひ付ぞ、オヽ苦しかッた專さん串戯にも程があるぜ、串戯とは何だ、血相を變へて危ないねお前どうしたのだナニ馬鹿者とは君の事で有たか失敬知らないからツイ馬とやッたのだ夫なら何か君のウヽ成程君のウヽ左様か君のウヽ君の何を畜生酷い奴だ宜しい僕も君の加勢を仕よう友達の者を横取りするとはよくない奴だ生皮を剝いで座蒲團にしてやらう居所は知て居る案内しやす、夫は有がたいオイ車夫大急ぎだ早く、且那何處へ參るのです

乳母の家には橘太郎が一人淋しく腕を組みアヽ如何も不思議だ彼程實の有るお絹が昨夜湯へ行くと云ッて婆さんと二人で出た道で何處へか見えなくなッたといふが大かた貸座敷の者に見付かッて引戻されたのであらうダカラ二三日は外へ出るなと云たのだが然し夫ならば今朝婆さんが様子を見に行たとき知れさうなものだが事に寄ッたら爰に溺れて居る事を專吉の鈍漢が悟ッて途中から……夫だと鈍漢の名は此方へ歸ッて來る譯だ一體彼は已の方へ來る譯なのだから專吉が誘ひ出すのは不埒だ横筋だよし〳〵是から已が出て様子を窺はうハテ氣の揉めたと立上るところへドカ〳〵押し込む二人橘さん男らしくしてお目に掛らうと專吉の勢ひ橘さん餘り筋が惡いね僕も專さんの介添人だ文句はないからお絹さんを出しなさいと詰め寄るを睨みかへして立上り筋が惡いとは其方の事だ先約の已が連れて來たのをまた横取に連れ出して逆捻とは呆れかへる、隱して置て連れ出されたとシラを切るとは卑怯な事だ、夫では全くお前の方では、夫では全く此家にはといぶかる雙方表に郵便

專さん橘さん誠に濟みませんが私は外の宜人の所へ行きますよお前さん達に惚たいのですがお前さん達はお前さんにお前さんが惚れて居て私の惚れてあげる隙がありませんから義理にも惚れられません二人ともアバヨ　きぬより

兩人は讀み下して思はず一齊にアバヨとは酷過ると尻餅搗くを木の頭此所よろしく拍子抜け